



ソカのアップテンポな音楽に合わせて、人々は踊り続ける。ちなみに、向かって右側が僕の好みの女性。

Yes!! We are alive!!

写真/文 越智 隆治

今は、水中や海洋ほ乳類の写真を中心に撮っているけど、実は人の写真を撮るのが好きだ。人々の生命力を感じる、まさにその瞬間にシャッターを切れた時の快感は、多分他の人にはわからない。自分だけが感じる事のできる世界。いつも一人心中の中で「よっしゃ！やった！」とつぶやき、静かに拳を握りしめてニヤリと半笑ひする。もし端からその瞬間を見ていたら、「何だこいつ、気持ち悪い」って思われるかもしれない。でも、多分、ほとんどの場合気がつかれてはいないはず。それくらい僕の感動の表現は地味なのだ。その性格は、時に撮影の邪魔になったり、まったく逆に大いに役立ったりしている。

もうかなり前になるが、カリブ海最南端の島国、トリニダード・トバゴを訪れた。目的は、毎年聖杯水曜日（アッシュ・ウェンズデー、イースターの6週間前にあたる2月の下旬頃）に行われる、この国のカーニバルの撮影。灼熱の太陽の下、露出度の高い、きらびやかな衣装を身にまとった老若男女が、トリニダード特有の音楽、ソカやカリブソのアップテンポなミュージックに合わせて、絡みつくように踊り狂う。

石油産出国であるこの国で生まれた独特な楽器、ドラム缶で作られたスチールドラム（パン）のみを使って、100人以上のメンバーで編成されたバンドが、音楽を競い合うスチールバンド・コンテストも圧巻だ。とにかく、どこにレンズを向けるか悩んでしまうくらい、人々のパッションが弾けてる状況が360度僕を取り囲んでいた。

どこで撮影していても、恥ずかしがるどころか、皆腰やヒップを突き出して、挑発するように激しく踊り

出す。「お前がカメラ向けると、彼女たち、一番過激になるな」と周囲にいた黒人カメラマンたちにちやかされたが、悪い気はしなかった。この時も僕好みのかわいい女性と目が合った。彼女たちは男性に肩車されたまま、ずっと僕に手を振ったり、ウインクしたりしていた。僕はたまに笑顔を向けたものの、基本的には冷静にシャッターを切り続けていたつもりでいた。

帰国して、フィルムを現像してから左の女性の、妙に鍛えこまれた腹筋に気がついた。「え、もしかして、二人とも、お・と・こ？だったのかな……」。これだけ見事な腹筋に気付かなかったって事は、案外冷静さを失っていたのかもしれない。何があったわけでも無いのだけど、できれば右の子は本当の女の子であって欲しいな〜と、切に願っていたような気がする。



スチールドラムがこれだけ集まって演奏する中に身を置くと、人々のパッションと振動で嫌がおうにもテンションが盛り上がってくる。

People
Photo Column by the Sea 01